

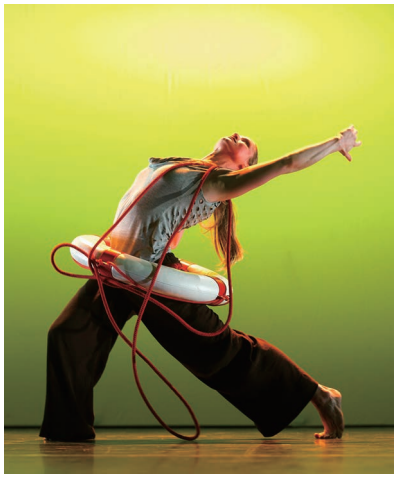
小野 あずさ

直感と即興

音楽を聴くと、色や景色が浮かんでくることがよくあります。個人的な好みや思い出、夢などが浮かんでくるものなので、必ずしも観客のほとんどが共感できるものではないかも知れませんが、音楽を聴いて浮かんでくるイメージや色合いは、なるべく第一印象を大事に、素直に照明に活かしたいと思っています。

コンテンポラリーダンスや音楽のフェスティバル（キャパ300 ～ 800人ほどの小中スケール）などで照明をさせていただくとき、1日15グループほどのテクニカルリハーサルと公演を、同じ日に行います。フェスティバル用に照明を吊り、フォーカスもエリアに分けられるようにするなど、多目的可能にします。前もって、照明のリクエストが送られてきたものには、できる範囲で吊り込みの時に、一緒に吊ってしまいます。

各グループの公演の長さが5 ～ 8分だと、テクリハの時間が30分間ずつ与えられます。この30分の間に、灯り合わせ、サウンドチェック、小大道具の位置確認、きっかけのチェックと通し（通す時間がある時だけ）をしなければならないので、シンプルに、かつ効率良く進めないと終わりません。その場で、はじめて見るリハーサルを見ながら、動きと雰囲気に合わせて、ほぼ即興で照明をプログラミングしていくことを、イギリスの劇場では照明デザインとは呼ばず、バスキッ（ト）と呼んでいます。Busk itは、フリースタイルで行うという意味で、頭に浮かんできたことを実行する、つまり即興で作り上げるということです。



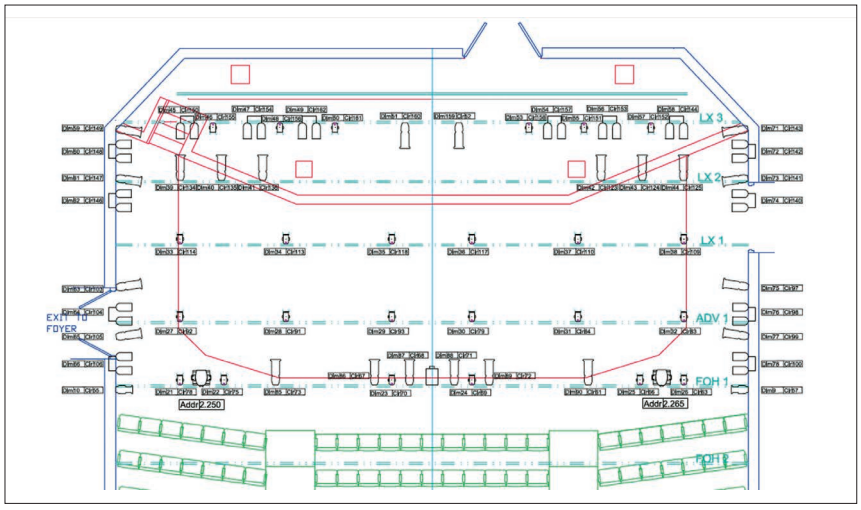
Akademi ダンスフェスティバル
@Southbank Centre（Busked by Azusa Ono）

Busk itに慣れている照明家、または照明テクニシャンは、ある機材を最大限に活かして、それぞれのグループの特徴とリズムを瞬時に理解し、サクサクと照明で味付け、強弱をつけていきます。その場で、振付家から細かい指示がある時もあれば、こちらにお任せということも、多々あります。Busk itをする上で、ブロッキング（ダンサーの位置）を素早く把握することは勿論必要ですが、最もセンスが求められるのは、ダンスと音楽から生まれるムードを、いかに照明で引き立たせ、時には、強調してあげられるかだと思います。これを瞬時に感じとって、灯りで表現するには、それなりの経験を積まないとできないことだと思います。

Busk itに経験豊かな、コンテンポラリーダンス劇場の専属テクニシャンと一緒に仕事をしていると、人それぞれ、違った工夫をしているのが見られます。

時間との勝負なので、要点を絞り、シンプルで行けるところはシンプルに、でも見せ場はできるだけ印象的に。本当に時間がない時は、音楽中のきっかけとムードだけ書き出しておいて、ベースライトだけ打ち込んでおき、本番はサブマスターを重ねてオペをされる方もいらっしゃいます。完全にマニュアルの方もいらっしゃいます。ロングフェードの場合はGoボタンを使うが、ダンサーが音楽より早く終わってしまったら、それをGoフェイダーでオーバーテイクする。インヒビッドフェーダー（インテンジティーのみ＝色とポジション以外）を作っておいて、スクローラーやムービング、そしてすべての一般照明のオンオフをできるようにし、暗転キューが即座に作れる用にする（ETCのGo to Cue Outができない古い卓の場合）。チェースのスピードはリズムに合わせてタップ2回で調整（Chamsys等）。コンピュライトのグランドマスターが100 ～ 200%まで上げられる機能は、素晴らしいです。本番の雰囲気で、変化をつけたくなった時に大変重宝します。通しをやってもらいながら、打ち込む時は、音楽のタイムコードが記録できる、Step TimerというiPhone Appが重宝しています。

即興で作り上げた照明は、結局は『間に合わせ』の照明なのですが、その『間に合わせ』を『一時しのぎ』の照明にするのか、それとも『間に合わせてできた即興の美』にするかは、その人のやる気とセンスと経験に、大きくかかっているなと思います。



Akademi ダンスフェスティバル 仕込み図（Drawn by James Oakley）



Step Timer（iPhone App）